

### 共通テーマ「現代社会における、健康と体力」：サッカーからのメッセージ「こどもたちが危ない！」

清雲, 栄純 / Kiyokumo, Eijun

---

(出版者 / Publisher)

法政大学体育・スポーツ研究センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学体育・スポーツ研究センター紀要 / 法政大学体育・スポーツ研究センター紀要

(巻 / Volume)

26

(開始ページ / Start Page)

70

(終了ページ / End Page)

70

(発行年 / Year)

2008-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005061>

**共通テーマ**

**「現代社会における、健康と体力」**

## サッカーからのメッセージ「こどもたちが危ない！」

清 雲 栄 純

人類が足でボールを蹴る事を始めたのは、紀元前3世紀ごろ中国で行われたと考えられている。

現在の形になったのは19世紀に入りイングランドのエリートスクールで行われるのを期にパブリックスポーツの生徒が立ち上げたフットボール協会設立を期に急速に全世界に広がりを見せた。日本ではサッカーとして浸透しているが協会創立は1921年と歴史は浅い。私は約40年前この競技と出会い、現在までその魅力に取り付かれている。当時は大学と企業が中心になり日本のスポーツを支えていた時代で、特に大学の施設は貴重なプレーの場となった。サッカーでは体育系大学以外は企業からスキルの高い指導者(OBが中心)が派遣されるケースが多く、技術・戦術はもちろん体力面や健康管理まで指導され、私たち学生は今まで経験した事のない情報を一気に手に入れる事になる。大学で活躍した選手は日本リーグ(企業)への道が大きく開かれ大学と企業の連携が日本サッカーのレベルを何とか維持していた時代でもあった。しかし、そこにはトップアスリートだけが生き残る図式しかなく現代、盛んに行われている子供たちに対しての一貫指導体制はほとんど存在せずかろうじてスポーツ少年団がその役を担っていたにすぎない。

サッカーの最大の魅力は技術習得には時間を要するが用具に費用がかからず(ボールさえあれば)、ルールが容易(17条しかない)でどんなレベルでもゲームに入りやすいところにある。その証拠に207の国と地域がFIFA(国際サッカー連盟)に加盟し、世界中で2億6千万人が選手として登録されている。(FIFA2007発表)トップレベルの試合になるとほとんどベンチコーチ(外からの指示)は通用せず瞬時のコミュニケーション能力が要求され、一旦ピッチに立つと自分の判断と決断が大きくチームに影響し選手の責任は他のスポーツより重い。そのためフィジカル面はもちろんメンタル面での健康維持は不可欠で自己責任に欠ける選手は淘汰される厳しいスポーツでもある。

日本では15年前、景気の波に左右される不安定な企業スポーツからの脱却を図るためにJリーグ誕生した。地域貢献を掲げた「ホームタウン」を合言葉に大企業だけに頼らない地域密着の経営戦略は少しずつ文化として根付こうとしている。その成果はファン・サポーターの増加に加え、スポンサーの心も揺り動かし選手のモチベーションに大きなパワーを植えた。同時にすべてのクラブが各年代の強化・育成・普及事業と指導者の育成にも取り組み一環指導体制が確立されてきた。その成果はワールドカップ連続3回出場を始めオリンピックやワールドユース世界大会出場の常連国としてアジアをリードするまでになった。この流れに自信を深

めた(財)日本サッカー協会は2005年宣言を発表「サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する。」という理念を掲げ「サッカーの普及に努め、スポーツをより身近にすることで、人々が幸せになれる環境を作り上げる。」とのビジョンを示した。この宣言に基づき『Jリーグ百年構想』が大きく動き出した。そのキーワードが「子供たち」である。

私の関係する大宮アルディージャでも創設直後の9年から「運動好きやサッカー好き」の子供たちを増やそうと、園児から小学校6年生(5歳から12歳まで)を対象としたサッカースクールを開校した。今では8拠点で毎週約2,200名の子供たちがサッカーを楽しんでいる。又、毎年60回を超える頻度で実施している事業にスクールキャラバン(選手やコーチが幼稚園や小学校で先生に代わり授業を受け持つ)や他のスポーツ団体と協働して子供たちに複数のスポーツと触れ合う機会を与えるアカデミー事業がある。この事業は日本の教育関係者からも注目を集めているが地域からも大きな期待が広がっている。

現代の子供たちはテレビゲームの普及や塾通いで、外遊びやスポーツに親しむ時間が少なく、運動不足やコミュニケーションが十分に取れない状況にある。私はサッカースクールやスクールキャラバン開催時に先生や付き添いの保護者から定期的に話を聞くようにしている。「大きな声であいさつをするようになった」「子供たちが給食を残さないようになった」「病気がちな子が風邪をひかなくなり、心身が鍛えられ頼もしくなった」「以前はテレビゲームに夢中になっていたが、今では家の手伝いや家族との会話も増え思いやりの心が出てきた」などの声を多く聞くようになった。文部科学省が実施している「体力・運動能力調査」でも明らかのように子供の体力や運動能力は30年前をピークに長期の低下傾向にあり、現在の子供の体格は親の世代を上回っているにもかかわらず、体力・運動能力は大きく下回っていて危機的状況にある。子供の体力や運動能力の低下は、将来的には国民全体の体力低下につながり、生活習慣病など健康に不安を抱える人々が増え、ひいては社会全体の活力が失われる事態が危惧されている。今こそ、このような状況を改善するためにもサッカーを始めスポーツ界が連帯して「子供たちの居場所づくり」に取り組み、日本にスポーツが文化として定着するきっかけになれば嬉しい。